
マリーゴールド号の悲劇

深川辰巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリー・ゴールド号の悲劇

【著者名】

深川辰巳

Z8546H

【あらすじ】

嵐にあって航行不能になつたマリー・ゴールド号。若い兄弟の航海士がそこで見た悲劇は……。

(前書き)

獨創的表現を含みますので、苦手な方は「」注意願います。

他の作品とはかなり作風を異にしています。

マリー「ゴーラード」船長航海日記より抜粋

九月十五日

嵐に巻き込まれマストが折れる。

九月十八日

嵐は過ぎ去ったが、航行不能。漂流開始。

九月二十八日

恐れていたことが起つた。救助がないままに、食糧が尽きる。水も残りわずか。

九月三十日

乗組員達が暴徒と化し船長室に押し寄せてきた。

今は扉を堅く閉めて難を逃れているが、いつまで持つだろうか？扉が破られた後に私にはどのような運命が待ち受けているのだろうか？

航海日記はここで終わっている。

「兄さん……」

「アンドリュー、見たらだめだ。あれは人の仕業じゃない」

船長室の外で、キリーは震える弟のアンドリューを抱きしめた。

扉を破壊した斧が振るわれる度に、鈍い音と船長の叫び声が聞こえてくる。

「ギャはは！ 船長！ あんたが能なしだからこんな事になつたん

だ！」

斧を振るつているボブの半狂乱的な言葉が周囲の乗組員達に伝播していく。

「そうだ！ 責任を取れ！」

「いいぞ！ やつてしまえ！」

船長の動きが止まつても、狂氣は留まることを知らない。

ボブの振るつ斧は

両腕を

両足を

頭部を

それでも飽きたらず、各部位を細切れにしていく。肉がちぎれ、骨が砕け、血が飛び散る。

「こんなもんか？ いいぜ、食つちまおつづー！」

ボブの命図を皮切りに、今度は狂氣の饗宴が始まる。

「兄さん……」

「アンドリュー、見るな、聞くな！」

あちらこちからで始まる肉を咀嚼する音。

キリーはアンドリューの耳をふさいだが、すっかり青ざめていることに気づいた。

「キリー、アンドリューなにせつてんだ。お前達も食えよ。子供だからつて遠慮することはないぜ？」

「この船の最年長サムだ。まだ二十に満たない兄弟がマリー、ゴールドに乗るよつになつてから何かと面倒を見てくれた。

この船における父親のような存在だった。

そんな彼が笑みを浮かべながら、手に赤い色をした何かを持つて近づいてくる。

「あ、あ……」

「ほら、お前ら食べ盛りだら、しつかり食べると良い」

サムの笑つた瞳の中に暗い光がある事にキリーは気が付いた。

「あ、ありがとう」

キリーが受け取り、アンドリューの口へと運ぶ。

「食べる、アンドリュー」

「え？」

「食べなければ……次に食べられるのは、俺達だ」

キリーはアンドリューの耳元でささやく。

「い、嫌だ……食べるのも、食べられるのも……」

「嫌でも……食え。生きるんだ！」

キリーは固く閉じられたアンドリューの口をじりじり開けて、無理矢理肉を詰め込んだ。

はき出さないよつに口を手で塞ぎ、飲み込むのを確認する。

「げほ！ げほ！」

むせるアンドリューを尻田にキリーはサムに向き直す。

「サム、もつと食べて良い？」

「もちろんさ。まだまだ肉はあるからな」

「まだまだな！」

サムの言葉に相づちを打つよつにボブが斧を持ち上げた。

「兄さん、船乗りって良いね。力仕事は大変だけど、海の上をこんなに早く走れるなんて！」

「だろ？ でもびっくりだな。お前まで船乗りになると言こ出すなんてな」

青空の下、穏やかな海を駆け抜けるマリー「ホールド号」の甲板で一人は休息の時間を楽しんでいた。

「兄さんと一緒に働きたかったんだよ」

「お前なあ、恥ずかしい事言つなよ」

キリーが赤くなつて頭をポリポリとかいていふと、サムが近づいてきた。

「兄弟仲良くて良いことだ」

「あ、サム。弟も乗せてくれてありがとうございます」「

儂が決めた訳じやない。船長だ」

「でも船長に口添えしてくれました」

「何、一生懸命なアンドリューを気に入つただけだ。しかし、まだ十五だつたか？ 海は穏やかなときだけじやないぞ」

「大丈夫です。何があつても頑張ります！」

「ははは！ 時化の時にも同じセリフが吐けると良いな！」

サムは思いつきアンドリューの背中を叩いて去つていった。

「兄さん、やはり大丈夫じやないよ」

「弱氣になるな。ほら、次の食事が来たぞ」

「今度は誰？」

ボブが右手に斧を、左手に肉の塊を持つて兄弟の所へやつてきた。「すまないな。今度の肉は一番時間が経つてから固くて美味くないかもしねない。だがお前らしつかり食えよ」

「一番時間が……」

「経つている？」

二人の脳裏にサムの笑顔が浮かぶ。

「兄さん……」

「泣くな、弱氣になるな。食え、食つて生き延びるんだ」

キリーはボブから肉の塊を奪い取ると歯みちぎつて、アンドリューに差し出した。

「ははは！ 分け前が増えたからたっぷり食べる事ができて良いだるうつ？」

ボブの笑い声がどこか遠くに聞こえる中、一人は咀嚼を続けた。

「兄さん……僕はもうダメだと思つ」

「弱気になつたらダメだと言つてゐるだらう。しつかりしろー。」
アンドリューの頬を軽く叩くが、もはや感覚がないかのよつて反応がない。

「僕が死んだら……」

「止める」

「僕の体は兄さんが……食べて」

「止めると言つてこだろ」

「あいつらに食べられるくらうなら……兄さん」

「ダメだ。起きろー。」

「…………」

「おこー。」

体を揺すつても叩いても反応は全くなかった。

「死んだか？」

「死んだな」

「一番若い肉だ……」

「きつと美味いぞ」

「さあ、キリー。アンドリューの死体をよこせ」
ボブがキリーの肩に手をかける。

「止める！ アンドリューは渡さないー。」

キリーはボブの手を払いのけた。

「なんだつて？」

「こいつ独り占めする氣だな」

「そう言えば、アンドリューは『兄さんが食べて』とか言つていたぞ」

「おい、キリー。今までみんなで仲よく分けてきたじゃないか。
俺達は仲間だらう。海の上で独り占めなんかしていたら、生きていけねえぞ？」

「アンドリュー」手を出すな

壁際に寝転がるアンドリューをかばうように手を広げてボブ達の前に立ちふさがる。

「なあ、この船の碇を知っているか？」

「手に入れた財宝は皆で山分けすること、だ

「独り占めした者には死を！」

「キリーに死を！」

「ボブ、遠慮はいらねえ！ やつちまえ！」

「おう！」

「あ、ぐわ！」

斧による頭部への一撃。

キリーはそれだけで気を失ってしまった。

気がつけば、たまたま通りがかった船によつて僕は助かった。

他に生き残りは居なかつた。

ボブに斧で殴られた後、何が起こったのかは分からぬがここからは想像だ。

僕が気を失つたのを死んだと勘違いして、すぐに噛みついたのだろう。事実腕などに噛みついた跡があつた。

だが、僕とアンドリューの肉を独り占めしようとした者が現れた。

僕の周りにはお互いが争つた形跡があつたのだ。

だが、弱つた体での殴り合いの果ては、お互に力尽きるという結果を迎えたのだ。

「遭難したマリー、『ゴーランド号』からの唯一の生還者……は、人の肉を食べた悪魔だつた、か……」

「この事故は今でも時々思い出される。

そのたびに悲しみと吐き気が襲ってくるのだが、それでも良い
と思っている。

弟の死を忘れていないといつ証でもあるから……

(後書き)

いかがでしたか?

悲劇・恐怖……そういうものが表現できていたらと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8546h/>

マリーゴールド号の悲劇

2010年10月26日14時27分発行